

暮らしの中の生きものたち

鷹

このコーナーでは身近でなじみ深い生きものたちを紹介しています

秋の「タカの渡り」はよく知られています。ルートも定まっています。ダイナミックなものは夏鳥としてやって来ていたサシバやハチクマ（ともにタカ科）の群れで、大の字の火床からも、少ない数ながら南へと飛んでいく姿を見た験があります。越冬地へと向かう秋の渡りに対して春の渡りはルートも異なり、分散的で見にくいです。タカたちのルートの選び方には、渡りの不思議を感じさせられます。

タカの仲間は、姿の美しさ、優雅な飛翔、そして狩りの名人として人々を魅了してきました。身近な森でも出会うことができます。とくに春は、秋から春先まで冬鳥としてやってきているものと留鳥とが合わさり、留鳥は夏にかけて子育てにいそしむため、出会う機会が増える季節です。大文字山周辺では、タカ目タカ科の、トビ(留鳥)、ノスリ(冬鳥)、ハイタカ属のオオタカ(留鳥)・ツミ(留鳥)・ハイタカ(冬鳥)、ハヤブサ目ハヤブサ科の、ハヤブサ(留鳥)、チョウゲンボウ(冬鳥、一部留鳥) などに出合えるかもしれません。また、伊吹山などではイヌワシ(留鳥)に、琵琶湖の湖北ではオオワシ(冬鳥)に、比叡山などではクマタカ(留鳥)に、鴨川などではミサゴ(ミサゴ科・留鳥)に、注目が集まります。

さて、『ゲド戦記』で作者アーシュラ・K・ル=グウィンが主人公ゲドの呼び名としたものは「スパロウホーク」でした。日本語版では「ハイタカ」と訳され、その語感が壮大な物語を貫いて響いています。しかし、作者自身が「私があの本を書いていたときに、想像の世界の中で見えていた鳥は、あの馴染み深い鳥—小型でカッコいいアメリカの *sparverius* ※にそっくりだった。…スパロウホークはハヤブサ属の中ではかなり小さい。そして、ゲドはやんちゃな少年だった」と振り返っているように、アメリカで「スパロウホーク」とは、ハイタカだけでなくアメリカチョウゲンボウを指す言葉でもありました。※ *Falco sparverius* : アメリカチョウゲンボウ

じつは、この混同はいずれも同じで、従来、ハヤブサは小型のタカと見做されていました。初列風切羽の形、換羽の順番、巣のつくり方、狩りの様子など明らかな違いは多いのですが、それもタカの多様性だとされてきたのでしょう。現在では、その姿が似たのは「収斂」であり、別の系統の鳥が同じような適応を果たした進化の結果だとされて、タカ目とハヤブサ目とに分類されるようになっています。

「日本鳥学会は、外見などからタカやコンドルに近いとしていた猛禽類のハヤブサを「インコ、スズメの仲間」と変更。…昨年9月、「日本鳥類目録」を12年ぶりに改訂し、DNA分析の結果などを基に、分類を大幅に見直した」(2013.3.19 日本経済新聞)とあります。

興味深い進化とはいえ、「鷹狩り」のタカ目にハヤブサが含まれないとなれば、世界中で大勢の人が驚いてしまいそう…、なにしろ「Falconry・鷹狩り」の双璧はハヤブサとハイタカ属のオオタカやハイタカだからです。

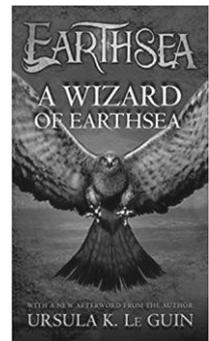
狩猟文化である「鷹狩り」は、約五千年前に中央アジアから西アジアの一带で、まさにハヤブサによって始まり、東アジアやヨーロッパへ、東南アジア、オーストラリア、南米へと各地のタカやワシと共に伝わって世界的に行われてきました。文化的には鶺鴒・隼(鶺鴒はハヤブサとクマタカ、隼はハヤブサを表わす漢字)はこれからも「鷹」であり続けることでしょう。

『日本書紀』には、百済の人と仁徳天皇が鷹(俱知)を使って雉を獲ったと書かれています。放鷹司(大宝令)、主鷹司(養老令)の設立も見られ、818年には『新修鷹経』という技術書も記されました。以来、為政者による放鷹文化が育まれ、やがて武士に好まれて江戸時代に大きく発展した様子は、襖絵、日本画、文学などでも伝えられている通りです。

肉食は免疫力に関与します。人類は、一万年も前からイヌを伴った狩りを始め、五千年前頃からは猛禽類たちの力も借りて、小動物や鳥の肉を手に入れながら厳しい環境を生き抜いてきたのでしょう。大きな翼を広げて春の空を舞う「鷹」たちの姿に、思い出すべきことは多そうです。



オオタカ 2020.4.5 法然院にて



『ゲド戦記』アメリカ版の表紙



ハイタカ 滋賀県湖北にて
Kai Klawitter さん(賛助会員)提供